

養殖生産数量ガイドライン（令和 7 年漁期）（案）

1 趣旨

このガイドラインは、個々の業者が自主的に計画的な生産を行い、生産者・消費者の双方にとってメリットのある養殖魚の安定供給を行う観点から、参考として、国内の需要と均衡すると考えられる国内供給量を提示するものである。

また、輸出を当該国内供給量の外枠として積極的に取り組むことにより、養殖業成長産業化総合戦略に掲げられた生産量目標を K P I として、養殖業の持続的な発展による成長産業化を図っていく観点から、「外部環境変化に伴う国内マーケットをとりまく現状」を提示するものである。

2 国内の需要と均衡すると考えられる国内供給量

- (1) ブリ : 8.5 万トン
- (2) カンパチ : 3.0 万トン
- (3) マダイ : 6.0 万トン

(参考) 養殖業成長産業化総合戦略における生産量目標（2030 年）（輸出量を含む）
 ブリ類 : 24 万トン
 マダイ : 11 万トン

3 外部環境変化に伴う国内マーケットをとりまく現状

(1) 養殖ブリ

- ・ 令和 4 年・令和 5 年のモジャコが計画通りに導入されたことにより、令和 6 年上期にかけて相場が軟化傾向を示した。
 - ・ 一方、昨夏の高水温による成長遅れの影響から、出荷魚のサイズが小型化。重量確保のため、多くの尾数が出荷されたことにより、在池尾数が減少し、令和 6 年下期には相場が上昇に転じた。
 - ・ 養殖ブリの輸出については、増加傾向で推移している。
- 〔 養殖ブリの輸出量（概算値）：令和 6 年 27 千トン（原魚換算後）、
令和 5 年比 17%増 〕

(2) 養殖カンパチ

- ・ 在池尾数が少なく、相場は高値で推移している。
- ・ 外食向けの消費が中心となっているが、小売では高値による消費者離れが懸念される。
- ・ 輸出向けについては、米国・アジア圏を中心に増加傾向。

B

(3) 養殖マダイ

- ・ 種苗導入尾数、生産量が安定しており、相場も比較的安定して推移している。

- ・国内向けに一定の需要があり、近年は特にフィレ等加工品の需要が増加傾向。
- ・輸血量全体の約7割を韓国向けの活魚出荷が占めており、今後の韓国の動向を注視する必要がある。

（養殖マダイの輸血量（概算値）：令和6年7千トン
（うち韓国向け5千トン）

4 留意事項

- ・飼料等の資材価格の高騰による生産コストの増加や自然環境の変化による生産効率の悪化については、養殖業適正取引ガイドラインを活用し、取引先との交渉を進めることにより、価格転嫁していくことが重要である。